

博物館資料に対する知覚アプローチの検討
-土器資料による実験観察から-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 全国大学博物館学講座協議会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒見, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22561

博物館資料に対する知覚アプローチの検討

－土器資料による実験観察から－

駒見 和夫*

はじめに

博物館はコレクションである博物館資料をもとに活動する。博物館利用者はおもに展示の場面で資料とかかわり、そこから情報を自ら獲得して思考を展開させることによって、博物館は学びの舞台となる。博物館展示における学びを観覧者が充実した価値あるものと実感できるようにするには、展示資料への観覧者のかかわり方が大きく作用する。この点について知覚アプローチという観点からの検討が本稿の目的である。博物館が取り組む展示教育の役割を高めるために、知覚型への理念の転換に関する意義と展望はすでに述べてきた(駒見 1999・2014)。これを土台に、展示の目的と資料を通した学びの意味を見据えて、土器を用いた実験観察の検討をもとに考察する。

1. 見る展示とさわる展示の背景

博物館展示における資料は、基本的に視覚で観察・鑑賞することが前提となっている。現代の博物館の直接的なルーツは近代のヨーロッパで成立したが、大英博物館やルーブル美術館に代表されるように、公共の位置づけを保持するに至ったことを本質とする。それ以前のキャビネット (Cabinet of Curiosities, Wunderkammer, Kunstkammerなど) のような特権階級にあるコレクターの私的空間と異なり、公共の博物館ではコレクションの意味合いが市民すべての財産へと変貌し、これを保全するために手をふれることが禁止され、視覚だけを使う空間が誕生したと指摘される(横山 2020)。万物のモデルをプライベート化したキャビネットは、本来、人びとへの公開を意図しておらず大勢が集う場ではなかった。そのため、ごく限られた人たちのなかでコレクションが披露される際は、手にも取って観察・鑑賞できる空間であった。近代以降の視覚によるアプローチに限定された展示スタイルは、公共の文化的遺産となったコレクションを管理して守るために定着した一面をもつのである。

その一方で、公共性を付与された博物館は社会の信託に応えるために、人びとへの教育の役割を高める工夫に取り組んできた。二元展示や組み合わせ展示、生態展示などの多様な見せ方、また、展示解説や展示関連のワークショップなどの各種のプログラムの考案

*明治大学 教授

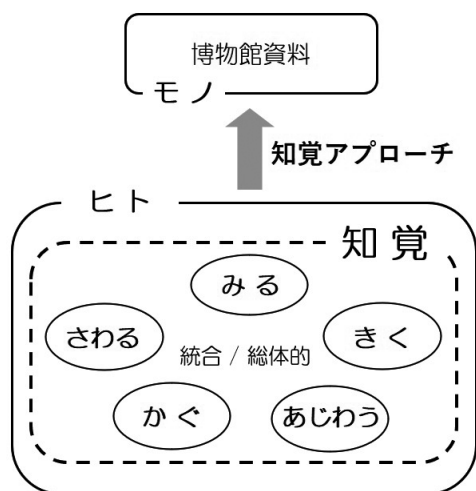


図1 知覚アプローチのモデル

で、視覚障害の人たちに資することを意図した触察もその一つである。20世紀後半になると、博物館教育の質の向上と効果的な実践の検討が進捗していたアメリカを中心に、モノと直接かかわる学習者の経験、すなわち体験をキーワードにして見ることに限定しない展示や活動が展開されていった。

日本の場合、明治初期に西洋から導入された博物館という社会システムは、やはり視覚によるアプローチの場として当初は認識されていた。草創期の博物館学をけん引した棚橋源太郎が昭和初期に上梓した『眼に訴へる教育機関』（棚橋 1930）の表題がそれを物語っている。見ること以外の展

示工夫の流れが出てくるのは1960年代後半からである。視覚障害の人たちへの対応として実践された触察展示であり、1981年の国際障害者年を契機に取り組む館が増えていった。1990年代になると、体験展示や参加型展示、またハンズ・オン展示と位置づけて、触察を中心に、幅広い人たちへ視覚以外でのアプローチを提供する展示が進捗した。多様な感覚を活用する展示は、好奇心を高める楽しい感覚や資料に対する理解と学びの深さを目的に展開され、今日に至っている。

このように、公共性の担保として近代の博物館では資料を手を取ることを遮り、ケースに収めて保護するようになった。ところが、公共として市民の信託に位置づく教育の役割を高める動向において、資料をケースから開放した露出展示や、多様な感覚にもとづく資料観察の方法の導入が進んだのである。つまり、視覚アプローチ以外での資料観察は教育性、すなわち資料による学びが一段と高まることを企図したのであり、それに適った効果的な方法が工夫されなければ、ねらいに適う価値は生じないものになってしまう。

以上の観点から、視覚だけに依らない方法を知覚¹⁾によるアプローチと捉え、博物館資料の展示のあり方において教育的意図を高める効果的な方法を導き出すことを目的に、実験観察による検討をおこなった。アプローチの対象とする資料は、視覚以外の観察による劣化や損傷の危険性が小さい点を重視し、考古学資料の土器を選んだ。なお、ここで用いる知覚アプローチは、視覚という一感覚だけに依存するのではなく、視・触・聴・臭・味覚などの各種の感覚を多角的・複合的に用いて対象に迫る方法、とするものである(図1)。

2. 土器の知覚アプローチに関する実験観察

実物資料の土器に対する知覚アプローチで生じる効果と問題点、および知覚アプローチの実践的な方法を検討するために、実験観察による調査を実施した。

(1) 実験観察の方法

土器を観察する被験者は18人の大学生（20～22歳）で、土器に関して基礎的な知識を有する考古学専攻の学生が4人含まれる。実験観察の場には5つの展示台を設け、8～9世紀の土師器の坏形土器4点と小型甕形土器1点をそれぞれの展示台に露出で配置し、被験者は四周から各土器の観察ができるようにした。すべての土器には小ラベルを添えた。博物館展示での土器の一般的なキャプションを想定して、学術名称と年代、出土遺跡名を記した簡潔な内容のものである（図2）。

被験者による土器の観察方法は、各人がそれぞれの土器を最初に視覚アプローチで観察し、つぎに知覚アプローチでの観察、最後は3～4人のグループとなって知覚アプローチにコミュニケーション²⁾を加えた観察、の三つの方法を順に実施した。この間、被験者には観察シートの作成を課した。各方法での観察を終えた後に、土器に対する気づきと感じたこと、考えたことを記録し、最後に三つのアプローチによる観察成果を比較して所見をまとめる内容である。調査は2019年10月17日に実施した。

(2) 観察者の行動と資料に対する認知

被験者の行動観察と、それぞれが記した観察シート、および事後の聞き取り調査から状況を検証する。

① 視覚アプローチ

観察者は全員、1点の資料に対して2分以内で観察を終えていた。だれもが展示台をぐるりと回って見る方向を変えながら観察し、一つの方向からは十数秒程度しか足を止めていない。観察者のほとんどは土器を見てすぐにラベルを確認しており、まったく見ない例は皆無で、ラベル情報に強く依存する様子が捉えられた。はじめにラベルを凝視する者もいたが、多くは土器を見た後にラベルを読み、視覚で捉えた土器の実像に付帯情報を結びつけようとするかのようにであった。少しでも多くの情報を把握しようという意図からか、土器とラベルを交互に何度も見比べる観察者もいた。

観察シートの記録を見ると、土器に対する気づきは「～のようにみえる」「～のような感じがする」という推測の反応が多くみられた。土器に見識をもっている考古学専攻の観察者を除き、「土器の用途や使用方法が判然としない」や「質感や重みなどがわからない」などから、見た目だけで判断することに不安をもち、全体に捉え方が懐疑的なのである。さらに、自分の理解が正しいのかがあいまいで、「軽そうで使いやすく思えるが、焼き物なので実際の重さや使い勝手はよくわからない」というように、不安やあきらめの気持ちの記述が少なくなかった。また、「炭のようなものがついているようだが、何だろう」「部分的に色が違うのは何故か」「何かで修復したような痕跡が見えるが、そうなのだろうか」などの疑問も多く示されていた。「よく見て観察するとわかることも多いが、それ以

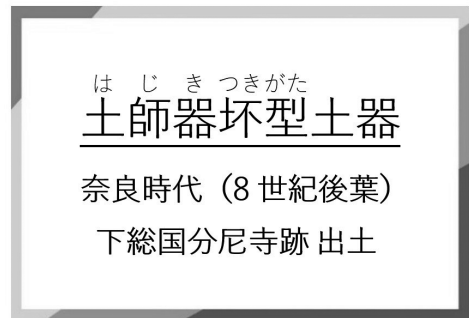


図2 土器に付したラベルの例

上に疑問もでてくる」ともあり、視覚で確認できる情報は少なくはないが、深く観察するほど把握できない事からも増えている状況が捉えられる。ほかに、「写真で見るよりも実物を直に見ることで詳細はわかったように思うが、土器の印象はあまり変わらなかった」とする見解があった。実物に接することで情報量は増えるが、土器に対する親しみや感慨は、視覚アプローチだけでは写真で見るのと大差がないとの感受である。

ラベルとの関係では、「土器の出土場所や使用年代はわかったが、視覚アプローチとラベルだけではイメージを広げることができなかった」「土器を見て考えようとしたが、考古学の知識のない自分にはラベルの情報量は少なく、思考を広げられない」と記されていた。今回作成したラベルの内容では、視覚による情報にそれが加わっても、観察者の土器の知見を深めるものとはなり得ていないのである。

②知覚アプローチ

知覚アプローチに際して、触察での観点や詳細な方法を教示することはしなかった。視覚の場合と同じ情報を観察者に示し、素手でさわわり持ち上げることを可能とした。ただし、観察前には手を洗い、劣化・破損要因となる装身具等を外すこと、触察は両手でやさしく扱い展示台に配置したクッション上でおこなうこと、高く持ち上げないことを求めた。実物土器の触察経験がある被験者は18人中5人で、考古学専攻の学生以外はほとんどが初めての体験であった。

観察者の行動は、土器を手にとって顔を間近に寄せ、見る角度を変えながら内側や底の裏側も観察し、器肌を撫でて感触を確かめ、ニオイをかいでいた。指先で焼き締め具合を探る様子もみられた。各土器に対して概ね2分程度、長くとも3分以内で観察を終えていた。視覚アプローチよりも観察時間は長くなっているが、伸び率は平均して1.5倍程度でしかない。アプローチの観点や方法の提示がなければ、観察時間は視覚アプローチと比較して顕著な差は生じないようである。

観察シートに多くみられたのは、「外面と内面では肌触りが違っていた」「底や下からの見え方などもわかり、土器が実際に使われていた場面を視覚だけの観察より深く想像できた」といった記述であった。手に取って隅々まで見ることができると土器の細部の状況や特徴に気づき、観察が深くなり、視覚で得た情報の量と質が拡大している様子が捉えられた。「何となくでしか意識できていなかったサイズ感や手ざわり感、置かれた状態ではわからなかった裏面などの詳細な情報が、さわって持ってみると得られ、視覚アプローチを補う観察となった」の意見にそれが表れている。情報源として拡大された視覚に加え、とくに触感が大きな比重を占めており、「土器を作る際に粘土から小石や砂などの異物が取り除かれておらず、それがザラザラする手ざわりの原因であった」とする見解もあり、複合的な情報で土器への認識を高めていることがわかる。「手に取って資料との距離を自由に調整してみると、置かれただけの展示は観察箇所が限定されていたことにあらためて気づいた」との反応もあった。

また、「見た目の印象どおりザラザラとした手ざわりだった」「修復の痕ではないかと見ていた部分がさわるとツルツルで、やはり復元しているのだとわかった」のように、視覚

で捉えていた情報が確認できたとする一方で、「見た感じと違って表面は滑らかだった」や「持ち上げると思いのほか軽かった」とあり、見た目とは異なる発見や気づきも多く指摘されていた。「土くさいニオイがするかと思ったがほとんど無臭だった」「坏型土器は思っていた以上に手にフィットした」とも述べられており、想像を裏切るような発見が少なくないようであった。

このように手ざわりやニオイ、さらに音の情報も加わったことで、「視覚だけよりも思考が広がる」という状況が生まれている。同様に、「土のニオイがして大昔の道具だという印象を強くもてた」「さわってみると想像以上に均質的で扱いやすい形状をしており、実用性の高さを感じ、生活に即した道具であることが強く感じられた」との見解から、体感を通して土器のイメージの深まりもみとめられた。さらに、土器自体だけではなく、その背後へのイメージの広がりも捉えられた。「土器を素手で直接さわったことで、実際に使用していた様子に思いを馳せることができた」「見るだけよりも当時の人間が作り使っていたものという実感がもてた」とあり、土器を用いた人間への眼差しが生じているのである。

一方、知覚アプローチで深まった観察から新たな疑問をもつ観察者が多くみられた。「土器の底に焦げつきのようなシミを見つけたが、どうしてできたのか」「外側と内側では手ざわりが異なるのはなぜか」など、視覚アプローチの場合よりも細かで具体的な疑問が示されていた。また、「見た目ではわからなかった重みや質感を体感でき、土器の実態が具体的に捉えられた」としながらも、「やはり使用目的はわからない」とあった。知覚アプローチによって土器のイメージや認識は深まるが、当然ながら知識がもととなる理解の深化は起こりにくいのである。

なお、知覚アプローチはさわることからスタートするが、展示資料である土器をさわって扱うことに戸惑う観察者は少なくなかった。土器に馴染みがないため、触察によるダメージを心配する観察者もいた。さわするためには注意とその知識を必要とする。触察の観点と合わせた具体的なアドバイスが何らかの手段で必要であり、それが十分でなければ、触察で得られる情報はさほど広がり得ないことが捉えられた。

③知覚にコミュニケーションを交えたアプローチ

3～4人のグループを作り、知覚アプローチをもとにコミュニケーションを交わしながら進めた。各グループの土器1点の観察は短い場合でも3分以上継続した。このスタイルでは観察時間が大幅に延び、会話の連鎖が途切れないグループもみられ、全体的に観察の場が和やかでリラックスした雰囲気になっていた。

観察シートからは、他者とのコミュニケーションで自己にはなかった観点が加わって多角的な観察となり、当該の土器に対する知見とイメージがいっそう拡大していることがわかる。他者の着眼点や知見が共有でき、同時にその着目や観察の仕方を知ることによって自己の観察が踏み込んだものとなり、理解が深まったとする意見が述べられていた。この前提として土器の知覚体験の共有が、観察の質と共感の意識を高めている様子が捉えられた。そのうえで自己の認識や疑問を相互に述べ合うことが体験の交換となり、他者の体験も取り

入れることができ、認識の幅が広がっているのである。「人によって目のつけどころが違うのを新鮮に感じられておもしろかった」との感慨もあった。

また、他者とのコミュニケーションから自身では考えが及ばなかった気づきや発想が生まれ、それらを共有して疑問を解決する思考を生み出す状況が形成されていた。「自分にはない知識や感じていなかった疑問が出てくると思考がひろがる」の意見のように、各人の気づきと疑問を軸に獲得した情報の交換や議論が起これ、知見を深めているのである。観察者の疑問から発したこのような議論によって、一部は解決への見通しが立てられている。考古学専攻の学生がいるグループでは、「専門的な内容を教えてもらえたので想像が広がり、自分では不思議に思っていた謎が解けて嬉しかった」と疑問のいくつかは解決に至っており、観察者の満足感が察知できる。

ほかに、「自分の得た情報を他の人にアウトプットすることで、自身の考えが整理されて明確になった」とする意見があった。他者に説明して伝えることにより、自己の理解や認識を明瞭にさせる効果に結びついているのがわかる。さらに、コミュニケーションを交えたアプローチを観察者の多くが楽しい体験と捉えており、「自分では気づくことのない疑問や考えを知ることができたのはとても楽しかった」などの感想が述べられている。ほかのアプローチではみられなかった反応で、「無言で観察するより、観察内容を他者と話せるのは心地よい」とも記されていた。

(3) 各アプローチの比較分析

それぞれの観察結果を比較すると、資料に対する認識や理解について、視覚アプローチの場合には主観にもとづく曖昧な部分が多くを占めていた。これに対し、知覚アプローチでは客観性が高まって認識や理解は明確化し、相互のコミュニケーションでさらにそれが進展して情動的な反応がみとめられた。観察者の思考についても、複雑化して重層的に広がっていく状況を捉えることができた。また、視覚アプローチは観察者にとって受動性の強い状態であるが、知覚アプローチは能動的な状況が生まれ、コミュニケーションが加わることで能動性が一段と進展していた。このアクティビティは資料に対する共感の気持ち、

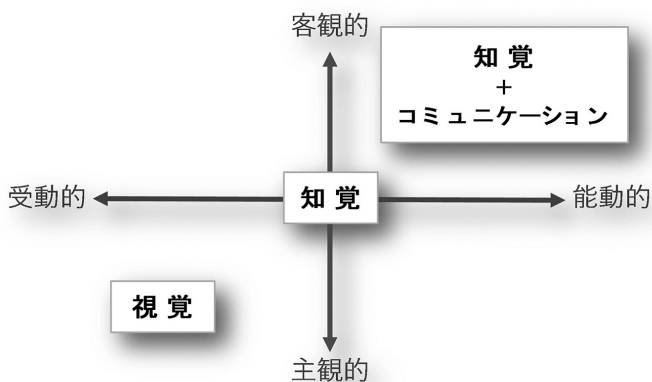


図3 各アプローチの学びの指向

他者との共有の感覚、さらに資料観察に対する楽しさの感情を醸し出す要因ともなっている。楽しさは資料観察の記憶の定着度を高め、さらなる観察体験に導くものとなり得る(図3)。

また、視覚だけのアプローチよりも知覚の方が各観察者の気づきや発見は多くなり、土器に対する知見が拡大していた。加えて、しっかりと見て観察することにより、ある程度の理解が

得られるとともに新たな疑問が生じ、知覚アプローチではそれを解決しようとする状況がみとめられた。この場合、視覚によって観察のポイントができていることから知覚での観察が深いものとなっており、コミュニケーションを交えたアプローチではそれが一段と多角的になっていた。視覚だけではわからなかったことが知覚でわかるようになり、コミュニケーションが加わることでそれぞれの疑問や認識が整理され、さらに自己の考えが至らなかったことにも気づくのである。

このように、視覚アプローチよりも知覚によって認識できる事からは増大するが、土器の場合、製作方法や用途といった本質にかかわる疑問は知覚アプローチでも解決には至っていない。一部は相互のコミュニケーションによって解決する場合もあった。今回、観察者の中に考古学専攻の学生がおり、当該の土器に関する知識を持つメンバーがいたグループでは、他者の疑問に適切に答える会話が交わされていた。「自分では当たり前と思っていた情報が他人には疑問点であることに少し驚き、教えることで相手の興味をさらに触発できた」との記述があり、疑問解消からさらに思考を広げている様子も看取された。

一方、土器の知識が全員に乏しい観察者のグループでは、教え合うことでの解決はできないが、相互に意見を交わして自分たちで疑問への答えを導き出そうとする状況がみられた。これによって活発なコミュニケーションが展開されていたが、多分に各人の憶測を広げるような内容となっていた。そのため誤った理解のまま議論が収束してそれぞれが納得し、ミスリードを招いてしまうこともあった。なお、コミュニケーションを通して新たな疑問も多く生じており、各観察者の観点が広がっている状況がみとめられた。また、自己の知識が比較的豊富な資料の場合、視覚や知覚のアプローチでもある程度の理解は得られるが、知識の乏しい資料においては、コミュニケーションが加わらなければ理解はほとんど生じないのである。

比較結果をまとめると、学び合って相互に認識や理解を深めることのできる意義の大きさから、知覚アプローチにコミュニケーションが加わるのがもっとも学習効果の高い観察方法といえる。ただし、いきなり相互の会話から始めるのではなく、各観察者が視覚アプローチで、さらに知覚で、そのうえでコミュニケーションを交えるというように、段階的に進めることが意義深いと捉えられる。「コミュニケーションがともなう観察はとても有意義だったが、それまでに外見を捉え、触感を確認して観察を深めたことが前提になっていたからこそ、意見交換でさらなる発見があったのだと感じた」や、「視覚アプローチで疑問を持ち、知覚で認識を深め、コミュニケーションで意見を交わして学びが完成したように思う」という意見が述べられており、観点を拡大させるようなプロセスを経ることで観察者の思考が深まり、学習効果の向上とともに達成感や満足感も高めている。同時にこのプロセスが、客観的で能動的な学びの成立誘因になっているのである。

3. 知覚アプローチの展望

すでに述べたように、近代に公共の位置づけを得て成立した博物館では、社会の共有財産となったコレクションを管理して守る姿勢を前面に出すようになり、視覚によるアプローチに限定した観覧スタイルが適用されてきた。その一方で、公共の役割を果たすために

教育的な工夫が進捗して多様な展示方法やプログラムを創出し、見るという行為だけではない資料とのかかわりも追究されてきたのである。ゆえに、知覚アプローチの実践にあたっては、資料による学びの効果の奏功を見定めることが肝要となる。

展示において博物館資料（モノ）から発信される情報（コト）には、博物館側が意図をもって提示するコトと、観覧者がモノを通して自ら考えて創出するコトがある。今回の実験で観察資料とした土器の場合、展示によって観覧者に提示するコトは、直接的には往古に使用された土器という存在とその現状、あるいは実態といえる。さらに土器を媒介として、人とかかわりや背後にある社会と環境などについて、考えを広げて得られる理解や認識である。前者はモノ自体が保持するコトであり、後者はそれをもとに思考を展開して得られる奥行きを深めたコトとなる。モノ自体から獲得するコトは思考の材料ともなるわけで、最大限の提供が求められるのはいうまでもない。この点で、多角的な観点からコトを獲得できる知覚アプローチは、視覚だけによるアプローチに大きくまさることは明らかである。ちなみに“触知性”の研究では、人は自己の触覚などの感覚や体験と結びつけて、言葉をはじめとする情報の意味を理解すると指摘されている（渡邊 2014）。コトを自分の身体的な感覚を通して押し広げる知覚アプローチという行為が、その意味の理解に結びつくのだといえよう。そして知覚はアクティブで選別的であるとともに、ありようは各人においてそれぞれ異なっている。ゆえに知覚アプローチは展示におけるユニバーサルなアクセスの保障につながる方法となる。ただし、すべてのモノがそれに適うわけではない。実験観察で用いた土器は生活道具であるため、知覚でなければ得られないコトの量は多く、触察による劣化や破損の危険は、丁寧に扱う環境と条件を整えることで概ね避けることができる³⁾。けれども、見せることが目的、あるいは見ることを用途とするモノへの知覚アプローチはほとんど意味が生じがたい。また、触察で劣化・破損の可能性の高いモノや、触察の行為が観察者に危険性のあるモノも対象には適さない。

そして、展示においてモノを起点にした思考をさらに展開させる役割を果たすのは、ラベルや視聴覚機器などの情報である。しかし、多くの来館者研究が指摘するように、展示におけるラベルは容易に読んでもらえない⁴⁾。また、読むことや操作して聴く行為は一方向性を否定しがたく、観察者の興味関心や疑問などの思考の展開に沿ってそれを押し広げるものとはなりにくい。今回の実験で作成したラベルは通常の展示キャプションをモデルにした内容で、細かな事項を短く羅列したスタイルである。観察者に最大限の情報の把握を求めたため全員がラベルを注視していたが、土器にかかわる知見を深めるものとはなり得ていなかった。一方、実験観察で明らかとなったように、他の観察者とのコミュニケーションは相互作用を引き出し、各人の思考の幅を広げ奥行きを深めるうえできわめて有益である。その場合、知覚アプローチにコミュニケーションを一体化させて、知覚と思考を連続した情報処理の過程とすることにより、モノから得られるコトを一段と認知的なアプローチに押し上げることを可能とした。知覚アプローチをもとにしたコミュニケーションは、観察者の知性と感性を多方向へと揺さぶる効果をもち、コトに対する理解と思考、さらに楽しさを深化拡大させるのである。「さわる展示」の推進に取り組む広瀬浩二郎は、「博物館で展示される物の背後には、それを創った人、使っている人、伝えてきた文化が

ある。…(略)… “創・使・伝”のプロセスは、目で直接見るができない。じっくり展示物にさわり、“目に見えない物語”を想像・創造する。これが“さわる展示”の要諦である」と説いている(広瀬 2020)。触察をもとにイメージーションを広げるうえでも、他者とのコミュニケーションは強い後押しになり得よう。

展示資料の理解において人と人とのコミュニケーションが価値をもつことは、解説員の活躍やギャラリートークなどへの評価を見れば明らかである。観覧者との対話から展示資料に対する興味を引き出し、理解を深めるように導く場面が作られている。また、美術館において、鑑賞者が自由に探究する機会の創出を目的とした対話型鑑賞(P・ヤノウイン 2015、など)も、資料である作品を対象にしたコミュニケーションの延長上に位置づくものといえる。これらは、資料に関する適切な知識をもとに展示ストーリーの意図を理解した博物館スタッフと、観覧者との間のコミュニケーションである。けれども、対話によって生じる認知の深まりとアクティブな楽しさは、観覧者相互によるものであっても効果は大きく、学びのモチベーションを高めることが今回の実験観察から指摘できる。

つまり、知覚アプローチは、コミュニケーションが加わることによって教育的な価値が強く引き出されるのである。また、資料に関するコミュニケーションは、知覚アプローチがあることで一段と観察力を高めて効果的になり、両者は相乗効果を生み出す関係となっている。このコミュニケーションと同様の効果は詳細な内容のラベルや視聴覚機器を介して生じるものでもあるが、それらは制約が大きいため観察者の思考や意識に沿うものとはなりがたく、人との対話に到底及ぶものではない。博物館利用者の驚きやワクワク感などを喚起してモチベーションを高め、新しいアイデアやイメージの生成プロセスとなる“触発”に着目した検討でも、知覚によるアプローチとコミュニケーションは触発を促す主要な働きかけと捉えられている(中小路ほか 2016)。また、科学系博物館におけるサイエンスコミュニケーションは、科学技術やその位置づけに対する意識を高め、人びとがそれについて探求し関与して学ぶ機会の提供を意図するが、ここでも触覚やその他の感覚を使った展示体験と人との対話は、インフォーマルな環境下でのプロセスとしての位置づけが看取できる(L・J・レニー 2015)。

そして、モノから発するコトの学びを効果的にするには、視覚から知覚、さらにコミュニケーションを交えたアプローチへ、プロセスを経た展開が適切となる。実験観察では、視覚でしっかり観察することで理解を得るとともに疑問が生じ、知覚アプローチではそれを解決しようとする状況がみられた。視覚によって観察のポイントを捉えていることで、知覚での観察がより思考的なものとなっていたのである。そのうえでコミュニケーションが加わることにより、自己が主導する意識のもとで思考が促され、それぞれが独自の意味づけをつくり出していた。ただし、観察者相互のコミュニケーションはコトの理解をミスリードする懸念があり、そこから創出されたストーリーは多分に曖昧さを含んでいる。このようリスクを伴うものではあるが、モノとコトを多角的に受け止めて、自ら思考を広げて自分自身で意味づけをすることは、博物館展示における学びの根幹的な価値とみなすべきと考える。

わが国の博物館は社会教育の位置づけをもつ活動体である。博物館展示は、観覧者への

教育的な意図をもって企画設営されるのは当然であり、その伝達の実現に苦慮しながら学芸員をはじめとするスタッフは展示をつくりあげる。このような展示を通した教育の方法は博物館の基本的なスタイルであり、それがなければ資料の羅列でしかなく、教育機関としての役割の放棄とみなされよう。ただし、観覧者が展示を通して得る学びは、来館者調査で指摘されるように、展示をつくった学芸員が意図しない内容や文脈で捉えられることは稀ではない。また、設定したねらいとは異なる部分に観覧者が注意を向けるだけでなく、想定外の方向に思考を広げることも普通である（J・E・ハイン 2010、など）。社会教育を担う博物館の学びはインフォーマルであることを本質とする。したがって、展示に込める教育の意図はこうした緩やかさが許容されるものであり、観覧者がそれぞれに意味をつくりあげながら展開していくものと位置づけるべきと考える。見るだけではない知覚アプローチとコミュニケーションを取り込んだ展示は、この位置づけにあって学びの効果を高めるスタイルとなり得るはずである⁵⁾。

ところで、2020年に生じたCOVID-19パンデミックに対応するため、日本博物館協会は「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」（2020年5月14日発表、5月25日・9月18日更新）を策定した。そのなかで展覧会の実施に当たってとくに留意すべきことに、「直接手で触れることができる展示物（ハンズオン）は感染リスクが高いため展示しないことを原則とし、止むを得ない場合は職員が管理して消毒を徹底する。また、屋外展示の場合は、鑑賞者が作品に直接手で触れることのないよう注意喚起や鑑賞方法の工夫を行う」⁶⁾ ことを求めている。また、これに先立って同年5月12日にICOMが発表した“Museums and end of lockdown: Ensuring the safety of the public and staff”では、考慮すべき警備項目に「来場者と展示作品の間に十分な距離があることを確認する」⁷⁾ としている。来館者の健康安全を守るため、展示などで博物館資料にさわることを回避すべき状況下ではあるが、知覚によるアプローチは人間の本質的な認知方法であり、上述のようにモノを通した学びの点で大きな価値をもつ。COVID-19はきっと克服されるはずで、以後に新たな価値観や方法論が模索されることとなろう。その場合においても知覚アプローチは無下に忌避されるべきではなく、危険性の除去に目を向けながらも、展示教育の効果を見据えて取り組むべき命題と考えている。

おわりに

今日の博物館は、ユネスコの「ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」（2015年採択）や、ICOM京都大会（2019年）で提起された博物館の定義の改正⁸⁾ に表れているように、社会的にも文化的にも多様な人びとが集い、それぞれが交流して文化的価値をつくり出す指向にある。人が日常の生活場面で外界のものや出来事を認知したり、新たな行動を学習で獲得したり、適応的な行動をとることができるのは体験の記憶にもとづくのだといえる。体験を通した学習で獲得される行動は、人が環境の変化に適応する基盤となる。多様な体験が大切なのである。

人びとの交流によって文化的価値をつくり出す博物館では、価値の定まった事からの情報発信というような、教示的で教養主義的な考え方や方法の見直しが求められよう。その

起点として、観点が拡大されて理解と思考の深化を図ることができるのは知覚によるアプローチである。ただし、博物館資料が発する情報は単体で形成されるものだけではない。多数の資料が相互につながって発する情報は、観覧者がそれぞれで創出するストーリーにおいて大きなウエイトを占める。この点は今回の観察調査では検討できておらず、今後の課題としたい。

また、知覚を核にして、視覚とコミュニケーションを段階的に取り入れていくアプローチは、身体と情動の両面を結びつけて、モノを通したコトに対するわかりやすさや楽しさを高める点で効果をもつ。博物館展示をわかりやすく楽しいものとするには、教育の質を保持する観点から批判する向きもある。しかし、博物館は公共の機関と位置づけられるものであり、公共の具体化は多様で幅ひろい市民の信託に応えることといえ、そのためにはわかりやすいや楽しいという視座は疎かにすべきではない。さらに、日常生活においてモノを認識して理解するために、各種の感覚の駆使や他者と語り合うという行為は、人びとにとってごく普通の行動である。公共の博物館では資料を守るための措置や他の観覧者への配慮が必要となるが、それらの条件をクリアーして、知覚によるアプローチと観覧者相互のコミュニケーションという行為を、教育の役割を高める観点で緩やかに受容していく対応が必要ではないだろうか。博物館資料の公共化はこうした観点での展望ももつべきと考える。

註

1. “知覚 (perception)” は、「人間をはじめとする生活体が視覚、聴覚、触覚などの感覚受容器を通して環境の事物やその変化を知ることを意味する。…(略)… 知覚はいくつかの受容器の相互作用に基づいた総体的な経験である」(『日本大百科全書』JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>) と説明されている。また、生物学的には「現在の環境にある事物や事象、さらにそれらの変化を認知すること。…(略)… 知覚は、感覚が統合されて具体的な意味をもち、独自の時空間的構造をもつより高次の機能」(『岩波 生物学辞典 第5版』JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>) であり、記憶や思考などと連続した不可分の情報処理過程と認識される。本稿ではこのような理解にもとづいて“知覚”を捉える。
2. 博物館において観覧者と資料との間で生じる相互作用を幅ひろい意味でコミュニケーションと捉える理解があるが、本稿で記すコミュニケーションは、人と人が意思や感情や思考を互いに伝達し合う対話を指して用いる。
3. 資料にさわるといふ行為が目的になってしまうと、破損を招く危険性が高い。触察によってどのような情報を得ようとするのか、そのためには如何に資料を扱えばよいのかを明らかにしなければ、さわることにより学びの価値は生まれない。博物館資料の破損の現実と向き合い、「標本をどうやって“さわ”かを伝えない状況では、標本にさわらせるべきではない、と言いたい。また、“さわられる展示”を行うならば、それに適した環境を作るべきである」(樽 2000) と警鐘を鳴らす学芸員の指摘は重い意味をもつ。
4. すべてのラベルを読む者は一人もいないが、ラベルを読む能力をもった来館者はみな

ラベルを読むとの指摘もある。ラベルをすべて読むのは物理的に不可能であるから、来館者は読むラベルに関して非常に選別的になるのだという（J・H・フォーク，L・D・ディアーキング 1996）。

5. 美濃加茂市民ミュージアム（岐阜県）では、常設展示室の歴史展示コーナーに触察資料を配置している。その一つに縄文時代の石鎌があり、「歴史にさわる／指先で・手のひらで・両手で／やさしく・ゆっくり／さわってみませんか／石のこと、作り出した古代人、発見した誰か、守り・伝えてくれた誰か／自由に想像してみませんか／発見、驚き、考えたこと、感じたこと／私や誰かに伝えてみませんか」と記したメッセージラベルが添えられている（2017年9月実地調査）。知覚アプローチをもとに対話を促す展示工夫の良例と思われる。
6. https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/jam_covid_guideline_20200514.pdf（2020/12/27閲覧）。当該部分は最初の発表以後、変更は加えられていない。
7. ICOM日本委員会訳文、<https://icomjapan.org/wp/wp-content/uploads/2020/05/ICOM-Museums-and-end-of-lockdown-1.pdf>（2020/12/27閲覧）。
8. 新たに提起された定義案は、ミュージアムをモニュメントの場ではなくフォーラムとして位置づける考え方の延長にあり、それを強く押し出したものと捉えられる。

参考文献

- 駒見和夫 1999「視覚型展示から知覚型展示へ」『国府台』9 和洋女子大学文化資料館
2014『博物館教育の原理と活動』学文社 pp.89-120
- ジョージ・E・ハイン（鷹野光行 監訳）2010『博物館で学ぶ』同成社 pp.201-230
- ジョン・H・フォーク，リン・D・ディアーキング（高橋順一 訳）1996『博物館体験 学芸員のための視点』雄山閣 pp.86-90
- 棚橋源太郎 1930『眼に訴へる教育機関』寶文社
- 樽創 2000「博物館における“さわれる展示”－壊される標本たちの現状－『哺乳類科学』40-2 日本哺乳類学会 p.182
- 中小路久美子，新藤浩伸，山本恭裕，岡田猛 編著 2016『触発するミュージアム 文化的公共空間の新たな可能性を求めて』あいり出版
- 広瀬浩二郎 2020『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！』小さ子社 p.17
- フィリップ・ヤノウィン（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター 訳）2015『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞』淡交社
- 横山佐紀 2020『ミュージアムを知ろう』ペリカン社 pp.46-48
- レオニー・J・レニー（渡辺千秋 訳）2015「第12章 科学系博物館における科学技術コミュニケーションの実践」『現代の事例から学ぶサイエンスコミュニケーション』慶應義塾大学出版会 pp.201-202
- 渡邊淳司 2014『情報を生み出す触覚の知性』化学同人 pp.15-16